

---

# あたし、騙されませんッ！

羽鳥 紘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あたし、騙されませんッ！

### 【Nコード】

N4579Z

### 【作者名】

羽鳥 紘

### 【あらすじ】

「お迎えに上がりました、我が姫」。ある日突然、豪華な馬車から降りてきた美青年が、あたしに向かってそう言った。銀髪金目のきらきら輝くこの美青年、なんとこの国の国王様。でもあたしはド田舎に住む貧乏な村娘。こんなうまい話があるわけない。あたし、騙されませんから！

## 1：きらきらさんが現れた

その日、あたしはいつものように、窓辺に群がる鳥のさえずりで目を覚ました。

カーテンのない窓からさんさんと陽光がさしこみ、眠いまぶたをこじあける。

粗末なベッドから起き上がってそつと窓をあけると、温かい風が肌を撫でていった。これは絶好の洗濯日和だ。

隣で眠っている妹二人を起こさないようにベッドを降りて、洗濯物が山盛りに盛られたカゴを持ちあげ外に出る。少し行儀が悪いけれど誰も見てはいないから、お尻で家の扉を閉めたそのときだ。ガラガラと大きな音を立てて、見たこともないような豪華な馬車が家の前にやってきたのは。

後で思えば、それは悪魔の足音だったのだろう。けれど、そのときのあたしにはぼかんと口をあけて、そのきらびやかな馬車にみとれることしかできなかった。王都の貴族が観光にでも来たのかとぼんやり考えていると、何故か馬車はあたしの前で止まった。

息をすることも忘れて立ち竦むあたしの前で馬車の扉が開き、その中から現れたのはこれまたため息が出るほどきらびやかで、この世のものとは思えないほど美しい男の人だった。

月より煌めくプラチナブロンド。星より輝く金の瞳。陶磁器より滑らかな肌を贅沢な衣装に包んだその男の人は、あたしをその眩しい瞳に映すと、にこつと笑ってこつ言ったのだ。

「お迎えに上がりましたよ、我が姫」

洗濯カゴが、ぼとりと落ちた。

「お母さん！ お母さん！！ お母さん！！！！」

仰天して家の中へ駆け戻ったあたしは、迷子の子どもの如くお母さんを連呼した。布を織りながら、そのまま寝てしまったのである。う母が、織り機の前でびくつと体を震わせる。

「……なあに、ラナ。どうかしたの。天からお金でも降ってきた？」「そんな馬鹿なことあるわけない！ 表に変な人がいるの！」

あたしの勢いに目を白黒させているお母さんを引つ張って、家の外へと連れ出そうとする。けれど幸か不幸か いえ、圧倒的に不幸なことに、その必要はなかったのだ。

そのきらきらの人物は、勝手に家の中に入ってきていた。馬車の音とあたしの声で起き出した兄弟達に取り巻かれて、きらきらさんは、きらきらと笑顔を振りまいていた。

「わぁー、きらきら！！」

「きらきら、きれい！！」

一番幼い妹と、二番目に小さい弟が、二人してきらきらを連呼している。

「ははは、きれいかい？」

「きれい、髪さわりたい！」

「触ってもいいけど、引つ張っては駄目だぞ。禿げてしまったら我が姫に嫌われてしまうからな」

そんな会話を聞いて、気が遠くなった。わがひめ、とはいったい何のことだろう。ああ、人違いをしているのかもしれない。でも、どうやったらこんな田舎の貧乏娘をどこぞの姫様と間違えられるのやら。

くすんだ茶髪と十人並みの顔、毎日の水仕事で手はがさがさだし、服だつてつぎはぎだらけ。父さんが死んでから、八人の兄弟と母さんとで懸命に生きているのだ。見てくれなんか気にしている暇はないのである。そんなあたしを姫だのなんだの言うなら、よほどその金の瞳は節穴なのだろう。

などとつらつら考えていると、突然お母さんがぐつと崩れ落ちた。そうよね、あたしだつて卒倒しそうなんだから、と心配してお母さんを覗きこむと、突然そのお母さんにぐいつと腕を掴まれた。

「馬鹿っ！ はやく膝をつきなさい！ エルレオン国王陛下よ！」  
「へ？」

母さんに引つ張られてこけながら、間の抜けた声があたしの唇から滑って落ちた。

## 2：それは単なる親子喧嘩だった

あたしが住むこのバーバーの村は、ヴェルハイム王国の端っこのド田舎にある。

王都にはそれは立派なお城があつて、銀の髪に金の瞳の、それはそれは綺麗な王様がこの国を治めているんだって死んだお父さんが言っていた。

「ええええ！？ 嘘でしょおお！？」

つついっついそんな叫び声を上げてしまつて、隣で母さんがひい、と蒼白になつてうめき声を漏らした。

でも、だつて、お城で国を治めている筈の王様が、こんなド田舎にいる筈がない。王様は国民の声を聞くのにとつても忙しいんだつて、お父さんだつて言っていたもの。

でもそんなあたしを嘲笑うかのように、きらきらさんの後ろから入ってきた御者が、えらく立派な剣をもったいぶつてこちらに翳した。

「ええい、この紋章が目に入らぬか！ こちらにおわすお方は現ヴェルハイム国王、エルレオンⅡヴェルハイム様にあらせられるぞ！」

掲げられた剣の柄には、あたしたち田舎の民ですら幼少期から頭に叩き込まれる、ヴェルハイムの紋章があつた。金ぴかで、細工や装飾も凝っていて、素人目にも高価なものだとわかるそれに、ははーと声を上げながら母さんが頭を下げる。

それを真似して、兄弟達もみんな、へへー、と言いながら膝をついて頭を下げた。

「何をしているの、ラナ！ 無礼でしょう！」

「いいんですよ、義母上。お嬢様はこれから俺の伴侶になるのです。王族といえども、夫婦の間に尊卑があつてはいけません」

何を……言っているのだろう、この人は。

感極まったようにきらきらさん あたしはまだ王様とは認めていない を拝み倒すお母さんを唾然と見ていると、きらきらさんはこちらを向いた。

「さあ行こう、我が姫」

「ちよ、ちよっと待って下さい。人違いではありませんか？」

「何を言うのだ、我が姫よ。この俺が、妻となる女性の顔を見間違える筈がない」

自信たっぷりにそう謳いあげて、きらきらさんがぱちりと右手の指を弾く。すると剣を掲げていた御者はそれを仕舞い、今度は本のような、四角いものを取りだした。……結構大きいんだけど、一体どこに持っていたのだろうか。

けどあたしがそれを突っ込む前に、御者さんが本？ のようなものを開いてたかだかと読み上げる。

「ラナ・ベイリー、十七歳。バーバーの村に生まれ、育つ。趣味、洗濯。好きなもの、晴れた日、パンケーキ。スリーサイズ上から……」

「待って待って待って、何よそれ!？」

あつけにとられてそれを聞いていたあたしだが、聞き捨てならぬ項目が出てきたので慌てて御者さんの声を遮った。

「何って、お見合い写真だよ。俺宛てに送られてきた……ね」

御者さんが持っていたものをくるりと裏返して掲げると、たしかにそこにはあたしの写真があった。でも、今よりも随分幼い。そりゃそうだ、写真を撮った記憶など一度しかなくて、昔王都で写真屋をやっているという人が村に来て、その人がサービスで撮ってくれたものだ。でもそれは父さんが生きてた頃で、五年は前の話になる。あたしはまだ子どもで、家族写真を撮った後に、お見合い写真を撮りたい！なんて馬鹿な我儘言っつて、写真屋のおじさんがその我儘を聞いて撮ってくれた一枚だ。

でも、なんでそれを王様が。そして、その子どもの写真を見て、王妃にしようと思う王様なんているんだろうか。ううん、だからこの人は、王様なんかじゃないんだって。

「これはどう見ても子どもの写真だったけど、田舎じゃそうそう写真も撮れないだろうからね。この少女が十七歳になったならば、さぞかし美しくなっているだろうと思ったのだよ。そして、やはり、俺の予想に間違いはなかった」

「お母さん、どうしてあたしの写真をこの人が持っているの!？」

がしつと両手を掴まれて、振りほどこうとしてもびくともしない。あたしは半泣きになりながら、さっきからの疑問をお母さんに投げた。この人が誰にしても、あたしの写真を持っているのは変だ。その答を知っているのはお母さんしかない筈で。

「だって、あたまこないだ言ったじゃない。早く嫁に行けって言ったら、相手が王様だったら行ってあげるわ、って」

「……まさか、それで王様にお見合い写真を送ったなんて……言わないいわよね……?」

さーっと、血の気が引いて行く。

ええ、言いました。確かに言いましたとも。

歳が十六を数えた頃から、お母さんは嫁に行け、嫁に行けと口やかましい。けれどあたしは、とてもじゃないけど七人の弟や妹と、もういい歳になるお母さんを残して嫁になんかいけやしない。

ひとつ下の弟でさえ、まだ十二歳。一番下の妹はやっと六歳。あたしがいなきゃ、兄弟の面倒は誰が見るの。

そう思ったあたしは、相手が王様ならねってはぐらかしてきた。だからって、本当に王様に見合い写真を送るひとがいますか!?

そして、そんな他愛ない親子の口論の果てに送られてきた田舎娘を、王妃に選ぶ王様がいますか!?

「事情は飲み込めたかい? じゃあ家族にお別れを言いなさい。大丈夫、お義母さんや君の兄弟たちの生活は俺が責任を持つよ。そうだ、なんなら王都に住んでもいい。それなら君も寂しくないだろう」

きらきらさんが言い出したそんな言葉に、お母さんの目の色が変わった。

兄弟達の表情が変わった。

まずい。これは、非常にまずい。

「ほ、本当ですか、国王様!」

「ほんと!?! 王都にすめるの!?! ほんと!?!」

「すごい! 王都いきたい!」

「わーい、お姉ちゃん王妃さまになるの!?! すごい!」

「じゃあ、あたしはおひめさまになれる?」

「ねえ、おつさまってなあに?」

「おつとってどこ?」

「おつさま、おつさまー!」

家族はあたしを一人残して、大騒ぎである。

それが本当なら、とてもありがたいことだけど。でも、でも、そんな上手い話があるわけない！ あたしは騙されないんだから！

### 3：割とんでもない理由だった

と、あたし一人が疑心暗鬼になってみたところで、勢いづく家族の前では無意味だった。

きらきらさんに引つ張られ、お母さんと兄弟みんなに背中を押されて、あたしは着の身着のまま馬車に押し込められて、御者さんがパシッと馬に手綱を打つと、あたしは荷物みたいにガラガラと運ばれていく。

みんなみんな、裏切り者だ。

窓に縋りつくと、生まれ育った家がどんどん遠くなって、あたしは涙で前が見えなくなった。

……なんで、こんなことになったんだろう。いつもなら、今頃洗濯物を干し終えて、家族のためにスープを作っている頃なのに。

「不満そうだね、我が姫？ 俺が相手に、いったい君にどんなデメリットがあるんだ」

「そんなの！ そんなの……、だって、こんなの……、おかしいもの。どうして王様が、あたしなんかを妃にするの。おかしいじゃない！」

「確かに、おかしいかもね。でも君に損なことはない筈なのに、何がそんなに、泣くほど嫌なのかと思ってね」

そこできらきらは、はじめて「おかしい」というあたしの言葉を肯定した。

けれどその後が続いた言葉は、どう考えても正論だった。

高貴な場所に生まれて、この国の頂点に立って、なのに結婚相手があたしみたいな村娘じゃ、がっかりするのは王様の方だ。

そしてあたしは、貧しい家で毎日家事に追われる生活から抜け出

せる。本当なら泣いて喜ぶような事態だろう。母さんみたいに。  
だけど、あたしは母さんや兄弟達みたいに素直じゃない。お父さんの代わりに家を守る身として、どうしても疑い深くなる。

この人がもしほんとうの王様ならなおさらに、こんな嘘みたいな話、現実にあるわけがないのだ。

どんな理由かは知らないけれど、浮かれていたらきつと痛い目に遭う。そんな気がする。

決して豊かな暮らしじゃなかったけど、あたしは家族が好きだし、家で過ごす日々が好きだった。洗濯してご飯作って、美味しいと兄弟が喜んでくれる顔を見るのが好きだった。

あたしが王様と結婚して、みんなが楽に生活できるならいいけれど。痛い目を見るなら、つつましく暮らしていた方がずっといい。

あたしは涙を拭くと、キツときらきらさんを睨みつけた。

「だって、こんなのありえないですもん。もし貴方が本当に王様なら、あたしが納得いくよう説明して下さい。どうして忙しい王様がこんなところにいるんですか。どうしてあたしなんかを選んだんですか」

思いきってそんな質問をぶつけてみると、きらきらさんはうーんと綺麗な銀髪に手を差し入れた。

「別に俺、忙しくないんだ。城に来ればいずれは分かるだろうから言うけど、まつりごとの類はほとんど妹がやっていてね。父上が亡くなったとき後継ぎの問題でだいぶ揉めてね、妹の方が適正はあったんだけど女王というのが異例だし、あんまり幼かったし。俺は、いわゆるお飾りさん」

そんな「お飾り」などという自虐的な言葉を、この人は酷く楽しそうに口にする。そして楽しそうな口調のまま、彼は次のあたしの質問に答を返した。

……この答えが、あたしの堪忍袋の緒をぶつたことになる。

「そんなお飾りさんの俺でも、何か人の役に立ちたいなああって考えていたんだ。そんなところに君の見合い写真だ。あれさ、けっこう問題になったんだよ？ 身の程知らずの無礼者って、君の家にお咎めがいきかねないほどにね」

そんなことを聞いて、全身が総毛立つ。

ほんとうに、お母さんはなんてことをしてくれたのだろう。

これじゃ冗談もおちおち言えやしない。けれどももうそんな機会もないんだろう。

話を聞いてよく分かった。やはりあたしはこれから都で、お咎めを食らうんだ。

「だから俺は思ったんだよ。ここはひとつ俺が犠牲になって、この貧しい家族を守ってあげようじゃないかってね。それで君と結婚することにした。どう？ これで俺に泣いて縋って礼を言う気になった？」

きらきらさんが、カラカラと笑う。

でもあたしは反対に、不信と悲しみが全部怒りの炎へと変わった。

確かに、あたしたち家族はこの王様の気まぐれに救われたのかも  
しれない。

でも、一体、なんだっていうの。馬鹿な母が分不相応な見合い写真送ったからって、なんだっていうのよ。

それでどんな不都合が生じたっていうの。ばいって捨てて、笑い話にでもしてくれれば済むことを。

それでお咎め？ 可哀想だから結婚してやる？

王都の人ってなんて傲慢なんだろう。

どうしようもない怒りと、悔しさと、憤りで、あたしは立ちあがると馬車の扉に手をかけた。

「……何を？」

「こんな屈辱を受けるくらいなら、あたしは死にます！ それで家族は許してください！」

涙をぼとぼと落として叫ぶあたしを見て、王様が驚いたように腰を浮かす。けどその頃にはあたしは、走る馬車の扉を開け放っていた。

凄い速さで走っていく馬車は、大きな川に差しかかっていた。

ちようどいい。

扉を開けたあたしに気付いて、御者さんが慌てて手綱を引く。でももうおそい。

川めがけてダイブしようとしたあたしは、だけど足を踏み出すことはできなかった。

ぐい、と強く手を引かれて、バランスを崩したあたしは、温かくて固いものに背中を打ちつける。

「あ……」

それは王様の胸だった。

ぎゅっと抱きしめられ、だけど混乱しきったあたしの頭は、それに抵抗する余裕もなく暗闇に落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4579z/>

---

あたし、騙されませんッ！

2011年12月16日00時45分発行